

『パリの景観保全：「ピトレスク」をめぐって』木  
岡伸夫編 『＜緑＞と＜出会い＞の空間へ 都市の風土  
学12講』

江口, 久美  
九州大学持続可能な社会のための決断科学センター

<https://doi.org/10.15017/4400015>

---

出版情報：決断科学. 7, pp.143-152, 2020-03-23. Institute of Decision Science for a Sustainable Society, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

## 自著紹介

# 『パリの景観保全—

# 「ピトレスク」をめぐる—』

木岡伸夫編『〈縁〉と〈出会い〉の空間へ 都市の風土学 12 講』

江口久美 九州大学持続可能な社会のための決断科学センター

本稿は、江口久美(2019)「パリの景観保全—「ピトレスク」をめぐる—」木岡伸夫編『〈縁〉と〈出会い〉の空間へ 都市の風土学 12 講』, 萌書房, 107-120, 2019.10. より、適宜文章・図などを引用、抜粋、追記、修正などしたものである。

「花の都」パリの魅力を形づくるのは、新旧の要素が調和した都市景観である。単なる古さでもなく新しさでもないその魅力は、どこから来るものか。オスマンによる大改造以後の近代化の中で、「ピトレスク」が美の基準として市民に自覚され、景観保全の指標となっていく。本稿では、この「ピトレスク」という概念をめぐるパリの景観保全の取り組みを紹介する。

フランス語の「ピトレスク」(pittoresque)は、「注意を引き、絵に描きたいような固有の様相による魅力を有する」ことを意味する。パリの景観に対するこの語の使用は、英語の「ピクチャレスク」(picturesque)から持ち込まれたと考えることができる。英語のピクチャレスクの初出は1705年であり、「絵画の要素または品質をもつこと、景色が良いこと」などを意味していた。



図 1：パリ改造で整備されたリヴォリ通り（2018）（筆者撮影）

しかし、その言葉の輸入は、単純な現象ではなかった。もともと、英語のピクチャレスクは、不規則な自然美を評価するための言葉であった。

このピクチャレスク概念がフランスで独自の進化を遂げるのは、19世紀になってからである。19世紀初頭、パリは古都でありながら近代化がうまく遂げられず、不衛生で過密な状態に陥っていた。それを象徴する出来事の一つが、1832年のコレラの大流行であった。1853年にセーヌ県知事となったオスマンは、パリを近代化すべく、パリ改造に着手した。パリ改造の目的は、プロジェクト事業として美観を取り入れた街路整備を行い、都市に機能性と合理性を獲得することであった。街路整備にはルネサンス＝バロック式の整列美が重視され、「対称性・直線を兼ね備えた広幅員街路とそのパースペクティブ上へのモニュメントの配置」が行われた(図1)。パースペクティブとは、眺望または眺望性を指す。この手法は、「オスマニズム」と呼ばれた。

こうしたオスマニズムはヨーロッパに広がったが、古い地区の急速で大規模な取り壊しを伴ったため、社会からの反発を招いた。オスマニズム以前の古きパリの保全活動の牙城となったのが、1897年にパリ市内部に設立された「古きパリ委員会」(Commission du vieux Paris)であった。彼らは、オスマニズムによる急速な近代化が進むパリにおいて、実際に町を歩き回り、パリ市民の享受する都市景観を発見すべく、撮影や記録を行った。そのうえで、ピトレスクであると評価した景観を、保全につなげる活動を行った。

特筆すべき活動を行っていた、建築家ルイ・ボニエ (Louis Bonnier: 1856-1946) により、ピトレスクであると評価された対象を分析した結果、ピトレスク概念は「多様性・構成・懐古性・自然・地方性・特異性」などを示すということが、明らかになった。

また、写真家ウジェーヌ・アジェ (Eugène Atget :1857-1927) による写真の分析を通じて (図2、3)、ピトレスクという概念は多様な含意を持ち、それまでのパリの景観に調和してパリの新しい魅力となるものであれば、新規の要素も含むことができる柔軟な概念へと、進化を遂げたのではないかと考えた。



図2：雑誌売店、モンパルナス駅とレンヌ広場（1898）  
（出典：Laure Beaumont-Maillet. *Atget Paris*, HAZAN, 1998, p.473）



図3：シャルシュ＝ミディにて、シャルシュ＝ミディ通り19番地  
（出典：Laure Beaumont-Maillet. *Atget Paris*, HAZAN, 1998, p.478）



図4：ビュット・オウ・カイユ地区（2018）（筆者撮影）

パリ市民の景観へのまなざしから生まれたピトレスク概念は、現在でもパリの景観保全の美の基準として息づいている。鳥海（2004）の挙げる例を見よう。13区に位置するビュット・オウ・カイユ地区は、低層の建物で構成され、緑が街路にこぼれ出す村落的な雰囲気を現在でも残している（図4）。



江口久美 えぐち くみ

九州大学持続可能な社会のための決断科学センター 総括チーム

1983年東京生まれ。2011年東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。都市工学専門。フランスの町並み保全と合意形成、ギリシャの観光まちづくり、緋文化の学際的評価を研究対象としている。主な著書に、江口久美（2015）「パリの歴史的建造物保全」中央公論美術出版。

## 第6回

# はるかなる山の呼び声

## ～テーブルマウンテンで出会った奇跡

矢原徹一

ケープタウンのホテルにつくと、テーブルマウンテンが目の前にそそり立っていた。

テーブルマウンテンは、南アフリカ共和国ケープタウン市の西側にそびえる断崖に取り囲まれた山地である。最も標高が高い地点は 1086m。山頂部には約 3kmにわたる平坦な台地が広がり、ツツジ科のエリカ類が優占する低木林が発達している。エリカ類は年中開花してお花畑をつくり、エメラルドグリーンに輝くタイヨウチョウの仲間の鳥がその花にやってくる。一方、市街地に接した山麓部から崖下の斜面にかけては、フィンボスと呼ばれる低木林が発達し、南アフリカ共和国の国花キングプロテアを始めとする、プロテアの仲間が群生している。エリカ類の花は小型だが、プロテア類の花は大型で、フィンボスのお花畑は頂上の台地とは異なる豪華な景色を見せてくれる。

いまではこうして、テーブルマウンテンの植生を紹介できるが、2007年に初めて訪問するまで、私はテーブルマウンテンについての知識をまったく持っていなかった。ケープタウンの市街地に近く、ホテルから歩いて行ける距離にあるとは、まったく想像していなかったのだ。





テーブルマウンテンの景観 (Wikipedia より)

それは私の初めてのアフリカ訪問だった。生物多様性国際研究プログラムの科学委員をつとめることになった私は、科学委員会に出席するために、指定されたホテルを予約し、野外にでることはまったく想定せずに、ケープタウンへと飛んだ。ケープタウンは治安が悪いことで有名な都市である。タクシーでもしばしば事件が発生するので、会議の事務局が手配してくれたリムジンで空港からホテルに向かった。そしてホテルに着くと、目の前にテーブルマウンテンの断崖が見えたのである。そびえ立つ断崖と山が、私を呼んでいた。

テーブルマウンテンに登りたいという衝動を抑えきれなくなった私は、ホテルのフロントで山への道を早速尋ねた。しかし、誰も道を知らない。まだ GoogleMap も GoogleEarth も使えなかったころなので、ネットで調べてみても、すぐには登山路の情報が見つからなかった。目の前に見えているから、山に向かって歩けば何とかなるだろうとシンプルに考えた私は、野外用の服装に着替えて、テーブルマウンテンに向かって歩き始めた。外国人観光客目当ての盗賊にあうリスクも考えて、いざという時に渡すそこそこの金額のランド紙幣をポケットに入れた。

市街地を抜けたところで、山火事の発生リスクを示す看板があった。後で知ったが、テーブルマウンテン山麓のフィンボスでは、10年に一回程度で山火事が発生する。ミカン科などの、葉に油をたくさんため込む性質



を持つ低木が多く、これらの低木の落ち葉が発火して、燃えるのだ。実はこれは、競争に弱い低木が生き延びる適応戦略であり、「燃える戦略」と呼ばれている。「燃える戦略」を持つ植物種は、「すす発芽」というもうひとつの戦略を持っており、山火事のあとで土壤中に供給される「すす」をシグナルにして種子が発芽する。こうして、山火事後にすばやく発芽し、すばやく成長して繁殖し、再び燃えやすい落ち葉をためるのだ。ちなみに、いま大規模な森林火災が発生しているオーストラリアのユーカリなどにも、「燃える戦略」と「すす発芽」が進化している。雨が多い日本ではなじみがない性質だが、アフリカやオーストラリアの乾燥地に発達した植生では山火事は自然現象であり、さまざまな動植物が「燃える生態系」に適応して生きている。

その「燃える生態系」であるフィンボスに、私は足を踏み入れた。初めて見る植物ばかりだ。興奮しながらしばらく山道を歩いていると、強烈な獣のにおいがした。山道の先を見ると、哺乳類の糞が見える。サバンナとちがって大型の肉食獣はいないはずだと思ったが、さすがに棲息している動物についての知識なくこのまま山に入るのは、危険が大きいと思った。幸い、時差調整をかねて会議の2日前に現地入りしたので、翌日も自由に使える。その日はホテルに戻り、情報を集めたうえで、翌日に山頂部を訪問することにした。調べてみると、テーブルマウンテンにはやはり、人間を襲う大型の肉食哺乳類はいなかった。

テーブルマウンテンに登るには、2つのルートがあることがわかった。ひとつは、西斜面の山麓にある駅からロープウェイで山頂部の台地の西北端（ウェスタンテーブル）に登る方法だ。これは楽な登山法だが、植生や景観の変化を観察しながら登る楽しみに欠ける。また、滞在先のホテルはテーブルマウンテンの東側にあり、ロープウェイの駅からは遠い。もうひとつの方法は、ホテルから徒歩圏内にあるキルステンボッシュ植物園からスケルトンゴルジと呼ばれる谷に登る方法だ。こちらは徒歩での登山になる。もちろん私は、スケルトンゴルジの登山路を使って登ることにした。スケルトンゴルジの登山路をたどると、フィンボスの低木林はやがて、谷沿いに発達したやや暗い森へと変わった。その森の終点は、頂上部直下の

断崖である。落差がもっとも小さい崖に、はしごがかけてあった。そのはしごをのぼって、断崖の上の台地にたどりつくと、そこは別世界だ。エリカ類のお花畑がひろがり、タイヨウチョウ類が花から花へと飛び交う世界が広がっていた。まるで桃源郷にたどりついたような錯覚にとらわれながら山道を歩いていると、双眼鏡でバードウォッチングをしながら山道を歩く、明らかに生物学者と思われる人物に出会った。How are you? Are you a biologist? と尋ねると、なんと翌日からの会議に参加する研究者だった。地衣類の集団遺伝学というかなりニッチなテーマを研究しているスイスの Christoph Scheidegger 博士だ。彼はロープウェイでウェスタンテーブルに上り、そこから徒歩でスケルトンゴルジをめざして頂上部の台地を縦断してきたところだった。しばらく偶然の出会いを喜び合ったあと、私は Christoph と別れてウェスタンテーブルをめざした。

その後、ケープタウンには会議で何度も再訪した。そのたびにテーブルマウンテンに登り、さらにはケープ州各地の植生を見て回った。ケープ州は見所が多い場所であり、テーブルマウンテンから約 30km 南には、アフリカ最南端の喜望峰がある。喜望峰にいたる半島部にはフィンボスが広がり、2000 種を超える固有植物が生育している。海岸のフィンボスで草を食むケープキリンにも出会った。また、喜望峰の近くには、小柄でかわいらしいケープペンギンの棲息地もある。フィンボスには、ペンギンとキリンが共存している。アフリカ大陸の南端にあり、南極大陸に面したケープ州ならではの、それは不思議な生態系だ。

ケープタウン市内の港、ウォーター・フロントにも出かけた。ここは市内の観光名所であり、防犯対策が徹底されているので、観光客は比較的安心して訪問できる。ウォーター・フロントで見たガンブーツダンスの躍動感はすばらしかった。南アフリカの金鉱山で働く鉱夫が生み出したダンスであり、リズムカルな手の動きや、軽快なステップは、鉱山の労働現場を監督する将校の動作へのパロディだということを後で知った。まだ治安に大きな問題を残すとはいえ、アパルトヘイト政策が撤廃され、アフリカ系とヨーロッパ系の人たちが共存の道を歩みだした南アフリカ共和国は、訪問するたびにダイナミックに変化を遂げていた。

やがて3回目の訪問の機会が巡ってきた。今回の訪問は、地球観測に関する会議に出席するためだ。このときも、スケルトンゴルジから台地の南端に登り、ウェスタンテーブルをめざして山道を歩いた。すると、遠くから歩いてくる懐かしい人影が見えた。Hi, Christoph. Happy to see you again. Why are you here? 何と彼は、私とは違う会議に出るためにケープタウンを訪問し、その機会を利用してテーブルマウンテンを再訪していたのだ。テーブルマウンテンが呼ぶ声に魅かれる二人が、時を同じくしてケープタウンを訪問すれば、奇跡は当たり前のように起きるのだ。

次に生物多様性関連の会議がケープタウンで開催されることがあれば、ぜひ参加したい。そして、もういちどスケルトンゴルジからテーブルマウンテンに登ってみたい。案外また、3回目の奇跡に巡りあうかもしれないと、そう思っているのは私だけではないような気がする。



矢原徹一 やはら てつかず

九州大学教授 持続可能な社会のための決断科学センター長

1954年福岡県生まれ。京都大学理学部卒。東京大学助手、助教授を経て1994年より九州大学教授。専門は生態学・進化学。著書に『花の性』『保全生態学入門』（共著）ほか。